

---

# 愛、変わらず

吾仁守

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛、変わらず

### 【Nコード】

N2530Y

### 【作者名】

吾仁守

### 【あらすじ】

私は一つ年上の先輩と付き合っていた。でも、先輩の卒業と同時に……フラれた。こんな私の、先輩と別れた後のラブストーリー！。

第一話 『私……つられちゃった(泣)』

「今年の春はいつもより寒いなあ」

思わず私は独り言を言っていた。

「本当に寒いのは私の心なのかも……」

また独り言を言ってしまった。

私がこんな状態になってしまったのは、一週間前のあの事件が原因だ。……事件は言い過ぎかも。

一週間前に私は……つられた。私はつられた理由が全くわからなかった。私と彼氏の関係はかなり良好……だった。

つられた理由で思い当たるのは……卒業式？ かな。彼氏と私は高校の先輩と後輩で、彼氏は今年卒業した。彼氏の卒業と同時に私はつられた。……やっぱり卒業式が原因だ。

「遠距離恋愛になるのがそんなに嫌だったのかなあ？」

あ、また独り言を言ってしまった。

「お母さん、あのお姉ちゃん独り言を言ってるよ」

子供が指を指しながら、私のことをお母さんに話しかけている。

「こ、こら。人に指を指しちゃダメですよ」

お母さんは、私に指を指していた子供を叱った。

「すみません」

お母さんは私の方を向いて謝り、その場から遠ざかっていった。

「変な人に関わっちゃダメよ」

私に聞こえていることも知らずに、少し離れた所でお母さんが子供に言い聞かせていた。

「お母さん……聞こえてますよ(泣)」

私はその場でぼそりと呟いた。

私は、赤城陽<sup>あかぎ はる</sup>。今年高校三年生になって、そして独り身になった。

「彼氏がいなくなると、こんなにも寂しくなるんだね」

「そんなことを呟いてる暇があるんなら、さっさとご飯を食べて学校に行きなさい！」

「はい」

私のお母さんはいつもマイペースだ。私がフラれたのに、いつもと同じ接し方をしている。むしろ、この方が気が楽だ。

私はご飯を食べて、学校へ行く準備をした。

「行ってきまーす」

「行ってらっしゃい」

いつもと変わらない学校への登校。唯一変わったのは、彼氏が迎えに来てくれないことだけ。

「今日もちよつと寒いなあ」

私は、何も考えなくていいように学校まで全速力で走った。

「ハアハア。全速力で走るとこんなに早く着くんだ」

前だつたら二十分もかかっていた学校までの道のりが、今日は十分で着いた。……今度から毎日走ろうかな。

「あれ？ 陽？ おはよー。今日はいつもより早いわね」

「あ、桜姫<sup>さくらひめ</sup>。おはよー。今日は走ってきたから、いつもよりも十分早く着いたわ」

彼女は田中桜姫。私と桜姫は幼稚園の頃からずっと友達だ。

「陽は何で走ってきたの？」

「な、なんとなくよー！」

「へえ、なんとなくね。……実は『彼氏にフラれた事を忘れるために走ってきた』……なんてことは無いわよね？」

「ギクツ（汗）」

何で私の考えを、こんなにもピンポイントで当てるのよ!?

「さ、桜姫、とりあえず教室まで行きましょ」

「まさか！ 凶星だったの！？ てか、別れたの！？」

「とりあえず教室に行きましょーね」

「ちょ、ちよつと……陽！？ 痛いんだけど……」

私は話を誤魔化すために、半ば強引に、靴箱から教室まで桜姫を引っ張りながら歩いた。

## 第二話 『親友』

私と桜姫（半ば強引に引つ張つてきた）は教室に着いた。

「ふう〜、やっと教室に着いたわ。あつ、やばい！ 私、春休みの課題が終わってなかったわ。だから走ってきたんだ。桜姫、そういうことだから」

「……陽、あなたが真面目な子だつてことは昔から知ってる。恋愛をしてようが、部活をしてようが、課題はちゃんとやってくる子だつてことも」

「桜姫……」

「何があつたの？ 私には隠し事はしないでよ」

「実は……」

私は、卒業式の後に彼氏にフラれた事を桜姫に話した。

「あなたの元彼……サイテーよ！ 卒業と同時に陽と別れるなんて（怒）」

「さ、桜姫がそんなに怒る必要は無いわ。……たぶん私が悪いのよ」「やっぱり元彼が全部悪い！ こんなに可愛くて優しい陽を裏切つたんだから」

「裏切つたは言い過ぎだよ」

「あんな人を庇う必要は無いわよ。あんな人のことはさっさと忘れて、新しい恋を見つけるわよ！」

「……新しい恋。見つけられるかなあ？」

「弱気になつちやダメ！ 何事も強気でいかなきゃね」

「そうだね。私、桜姫みたいに強くなる」

「あんまり私みたいにならない方がいいわよ」

「どうして？」

「……男子が近寄つてこなくなるからよ」

「そ、そうなんだ……。桜姫可愛いのに」

「陽に比べたら、私なんか全然可愛く無いわよ。それに、現在の男いま

子達は性格を重視してみたいよ」

「性格が良くないとモテないってことね」

「そうね。私は今日から女を磨くわ。クラスも変わったし、ちょうどいい機会だわ」

「桜姫は今のままでいいと思うんだけど……」

「ありがとう陽。でも、そう言ってくれるのは陽だけよ」

「そうなの？」

「うん。だから私はもっといい女になれるようにがんばるわ。幸いにも、このクラスで私のことをよく知ってる男子は少ししかないみたいだから」

「ホントだ。知らない男子が多いね」

「そうなの。そして、イケメンで優しそうな人が多い」

「相変わらず桜姫はイケメン好きだね」

「相変わらずとは失礼ね。性格もちゃんと視るわよ。今日から私は変わるんだから」

「ホントかなあ？」

「ホントよ。いい彼氏を見つけれられるように、しっかりと見定めるの」

「今回は本気だね！」

「もちろん！ お互いに、いい彼氏をつくるわよ」

「うん！」

こうして、私と桜姫のいい彼氏づくりが始まった。……………何か私、切り替えがかなり早い気が……………。ま、いつか。

### 第三話 『まずはお友達から』

新しい恋を見つけると決心した私と桜姫は、まずは友達をつくることにした。

「陽、まずは友達をつくるのが大切よね」

「そうだね。まずは男子と仲良くなる必要があるね」

「そうよ。そして、最初に誰と仲良くなるかが重要よ！ 仲良くなる人を間違えたら、高校最後の一年は悲しく寂しいものになること間違い無しだわ」

「桜姫は大袈裟だわ」

「大袈裟じゃないわよ。男なんて、みんなけだもの獣よ！ 化けの皮を被ってるの！」

「そうなの！？」

「そうよ！ 陽は男のことをまるでわかってないわね！」

「ご、ごめんなさい」

「な、なんで謝るのよ？」

「桜姫の気迫にびっくりして……つい……」

「男は獣ってことはしっかりと認識しておくこと。わかったわね？」

「りよ、了解です！ 隊長！」

「た、隊長って何よ！？」

「なんかそんな感じがしたから」

「わ、私は隊長なんて柄じゃないわ」

「桜姫が照れてる。可愛いー」

「べ、別に照れて無いわよ！ と、とりあえず誰かに声を掛けてみるわよ」

「わかりました！ 隊長」

「隊長って呼ぶのやめなさい！」

「また桜姫が照れてる。可愛いー」

「もう！ 陽のいじわる！ ……ま、いいわ。とりあえず、誰かに

声を掛けるわよ」

桜姫はクラス中を見渡した。そして、あることに気がついた。クラス中の視線が自分たちに集まっていることに……。

もちろん、いつからこんなことになっているかなんて知る由もなかった。

「……やばいわね」と、桜姫が小声で言った。

「何が？」と、陽も小声で言った。

「今までの私たちの会話を、男子に全部聞かれてたかもしれないわ」  
「うん。知ってるよ」

「な、何で教えてくれなかったの!？」と、桜姫が大声で言った。

今度はクラス中がざわつき始めた。

「や、やばっ」

桜姫は赤面し、小声で、

「何で教えてくれなかったの？」と陽に問い掛けた。

「桜姫がすごく楽しそうに話してたから、言えなかった。ごめん」

「は、陽は悪くないわ。悪いのは、気づかなかった私の方よ。……」

……これから、このクラスは、私たちにとって戦場になるわよ」

「なんかホントに隊長みたい」

「もう何でもいいわよ!」

私と桜姫は、アウェイな状況の中で、男子に声を掛けることを決心した。

#### 第四話 『お友達になっちゃった』

クラス中の人に羞恥しゆうぢを曝さらした私たち。そんな私たちと仲良くしてくれそうな男子に声を掛けるために、私たちはクラス中を見渡していた。

クラスには、いろんな男子がいた。ほとんどの男子は、一般的にイケメンと呼ばれるような顔立ちをしている。

「ねえ、陽。誰に話し掛ける？」

「桜姫は、誰が仲良くしてくれると思う？」

「うーん、あそこにいる人とか優しそうだよね」

「うん。優しそう」

「でも、ちよつと私のタイプじゃないかも」

「あれ？ 性格も重視するんじゃないかな？」

「そ、そうだったわ」

そんな会話をしていたら、会話の中心になっていた男子が近づいてきた。

「ねえ君たち、さっきまで面白そうな話をしたよね？ 次は何の話をしているの？」

思いがけないチャンスが舞い込んできた。

「うーん、……あなたについての話」と、桜姫が答えた。

「へえー、僕についてかぁー。何て話してたの？」

「優しそうだから、友達になりたいなあー、って話してたの」と、  
またも桜姫が答えた。

全く会話に入れない私。

「僕と友達になりたいの？」

「う、うん」と、戸惑いながら、またも桜姫が答えた。

「じゃあ友達になろうっ！」

「はやっ！ ……じゃ、じゃあ、まずは自己紹介をしましょ」

「そうだね。僕は、立花流たちばなながれ。君は？」

立花くんは、私の方を見ながらそう問い掛けてきた。

「わ、私!? 私は赤城陽」

「陽ちゃんって呼んでいい?」

「あ、はい。私は立花くんって呼びます」

「うん。いいよ」

「ちょっと待ったあーっ! 何で私の存在を無視するのー!? 立花くん、今まで私と話してたよね?」

「あ、ごめんごめん。さっきまで君とずっと話してたから、次は陽ちゃんと話そうかなあと思って」

「そうだったの? ……せ、せめて自己紹介だけでもさせてえー」

「それじゃあどうぞ」

「なんかかなり言いづらいんですけど……。ま、いいわ。私は田中桜姫」

「じゃあ桜姫ちゃんって呼んでいい?」

「OKよ。私も立花くんって呼ばせてもらっわ」

「陽ちゃん、桜姫ちゃん。今日からよろしく」

「『こちらこそ、よろしく』」

こうして私たちは、立花くんと友達になった。なんかかなりあっさり友達になっただけ、大丈夫かなあ? ……ま、いつか。

第五話 『さ、避けられてる!?!』

立花さんと友達になった私たちは、立花さん以外の男友達をもつとつくるために、クラスに立花さんの知り合いはいないのかを尋ねていた。

「立花さんは、このクラスに知り合いはいるの?」と、桜姫が尋ねた。

「このクラスに知り合いは………いないみたい」

「そ、そうなんだ」

「ごめんね。役に立てなくて」

「そ、そんなことないわよ」

「そうよ。とりあえず、仲良くなれそうな人を探そ!」と、私が提案した。

「またも私たちはクラス中を見渡した。」

「立花さんは、誰が友達になってくれると思う?」

「うーん、……あの人とかどうかなあ?」と、立花さんは一人の男子を指さした。

「なかなか人の良さそうな人だね」と、桜姫が答えた。

「よし、じゃあ声を掛けてみよう!」と、立花さんが言い、男子に近づいていった。

だが、男子は立花さんから逃げるように教室から出て行った。

それから立花さんは、とぼとぼとこちらに戻ってきた。

「……なんか僕避けられてるみたい」

立花さんは、かなり落ち込んでいた。最初の印象とはかなり違う人に思えた。

「た、立花くん。落ち込まないで」

「う、うん」と言いながらも、まだ落ち込んでるように見えた。意外と立花さんは打たれ弱いことがわかった。

改めて、私たちはクラス中を見渡した。

一時見渡して、あることに気がついた。……クラス中の人が私たちと目を合わせないようにしていることに……。

「……みんな目すら合わせてくれないような気がするんだけど」と、桜姫が言った。

「みんな目を合わせないようにしてるんだよ」と、私は言った。

「私たちと関わりたくないのかな？」

「……たぶん。今年は受験もあるし」

「そうだね。受験があるのに、変に騒いでいる私たちと仲良くしてくれる人なんてなかなかいないよ」

「立花くんは、なかなかいない人の一人だね」

「……僕は、なかなかいない人の一人かあ」

なぜかテンションの上がっている立花くん。……立花くん、実は天然なのかな？

「そ、そうだね。……とりあえず、まずは私たちのクラス中での印象を変えないとね」と、桜姫が言った。

「三人よれば文殊の知恵なんて言うからね。まずは三人で何とかしましよ」

「さすが陽。陽がいれば百人力よ！立花くんも頑張ろうね」

「やっと会話に入れてくれた！僕も全力を尽くすよ」

三人は結束し、もっと多くの男友達をつくるために努力することを誓った。……はあ、彼氏はいつごろできるんだろう？

## 第六話 『数々の難関』

午前八時。担任の先生が来てホームルームが始まった。

「おはよう！ 今日からこのクラスの担任をすることになった原熱志だ。今年で三十路になる。よろしくな！」

クラス中が少しざわつき始めた。先生が三十路に見えないくらいイケメンだったからだ。

「俺が担任になったからには、お前たちの目標を全部実現してやる。だが、条件付きだ！ 毎日努力をすること、それと……恋愛をしないこと！ これが条件だ」

ざわついていたクラスが一齐に静まりかえった。

「よしっ、じゃあ一人ずつ自己紹介をしてもらおうか」

一番前の人から順番に自己紹介をしていき、立花くんの番がきた。

「僕は立花流。現在、男友達募集中！ よろしく！」

「そうか、立花は男友達を募集中なのか。じゃあ、先生が友達になつてやる！」

「えっ！？ じゃあお願いします」

「おう、よろしくな」

「『あははは』」

クラス中から笑いが巻き起こった。やっぱり……立花くんは天然だ。

立花くんの後に何人かが自己紹介をし、次は桜姫の番になった。

「田中桜姫です。今年の目標は彼氏……じゃなくて、山竜大学合格です」

「田中、なんか彼氏って聞こえた気がするんだが」

「き、気のせいですよ先生。とりあえずよろしくお願いします」

桜姫、本音が出てるよ……。

そんなこんなで、とうとう私の番になった。

「えーっと、赤城陽です。目標は一柳大学合格です。よろしくお願

います」

全員の自己紹介が終わった。一段と目立っていたのは、やっぱり立花くんかな。

「やっと全員の自己紹介が終わったな。今日からビシバシ行くからな！」

彼氏ができても、原先生にはバレないようにしないと……。

今日一日の授業がやっと終わった。

放課後、クラス中の人がいなくなってから、私たち三人の作戦会議が開かれた。

「どうすれば印象を良くできるかな？」と、私は質問をした。

「印象を良くするためには、まずは挨拶かな」と、立花くんが答えた。意外とまともな答えだった。

「挨拶かあ……。……明日の朝から、廊下ですれ違ったクラスメイト全員に挨拶をするっていうのはどうかな？」と、桜姫が提案した。

「よしっ、じゃあそうしよう！」

「決まりだね！」

こうして私たちの作戦会議は終わった。でも、私は少し不安に思っていた。挨拶をするだけで印象が変わるのだろうか？ ……ま、どうにかなるでしょ！

## 第七話 『私たちってウザい?』

登校二日目。今日から作戦決行だ！ 私たちは顔を合わせたクラスメート全員に挨拶をした。挨拶を返してくれる人もいれば、無視する人もいた。

「初日の反応は微妙だったね」と、立花くんが言った。

「印象変わったのかな？」と、桜姫が言った。

「ごく少人数かもしれないけど……」と、私が言った。

「少人数でもいいんじゃない。少しでも仲良くしてくれる人が増えるといいね」

こんな会話をしていると、こちらに近づいてくる男子が一人いた。ヤンキーっぽい人だ。

「お前たち、朝挨拶をしてきた奴らだよな？」

「そうだよ。君は？」

「俺？ 俺は篠山早駆だ。お前たちは、昨日かなり目立ってた奴らだよな？」

「め、目立ってたって何よ!?」と、桜姫が食ってかかった。

「ちよ、ちよつと桜姫!? 落ち着いて」と、私が止めた。

「それで早駆くんは何の用なんだい？」と、立花くんが尋ねた。

「お前たち……ウザいんだよ」

「『えっ?』」

三人とも声を揃えて驚いた。

「う、ウザいつて何よ!?」と、またも桜姫が食ってかかった。

「お前らのことは、最初っから気に入くわなかったんだよ」

「何なのよ!? 何が気に入くわなかったのよ？」

「全部だよ！ 特に、その男！ お前を見るとイライラする」

「勝手な言いがかりはやめなよ。みつともない」

立花くん、何だかかっこいい！

「そういう態度がム力つくんだよ！ 今年は受験もあるんだから、

邪魔すんなよ！」

篠山くん、何気に真面目！？

「気に入らなかつたんならごめん。今後気をつけるわ」と、私がフオローをした。

「ちっ。……今度から気をつけるよ」

意外にも、あっさり引き下がった。聞き分けのいい人で助かった。

篠山くんは自分の席に戻っていった。

「篠山くんは私たちのことをウザいって言ってたけど、他の人はどう思ってるのかな？」と、桜姫が言った。

「他にも、ウザいとか鬱陶うつとうしいとか思ってる人はいるんじゃないかな」と、立花くんが言った。

「だったら、朝の挨拶はやめた方がいいんじゃない」と、私が提案した。

「……こんなことで諦めたくない！」と、桜姫が怒りのこもった口調で言った。

「どうして？」と、立花くんが尋ねた。

「私は、今年変わるって決めたの。だからこんなことで諦めたくないの！」

(今年は絶対に彼氏をつくる！)

桜姫は心の中で自分に言い聞かせていた。

「よしっ！ じゃあ、明日も頑張ろう」

「うん！ 桜姫のために頑張ろう」

「私だけのためじゃないでしょ！？ 陽もでしょ！」

「そうだね」

私たちは、明日からも挨拶を続けることを決めた。……篠山くん以外に。

## 第八話 『協力者』

登校三日目。私たちは今日も挨拶をした。挨拶を返してくれる人が増えたような気がした。

「みんな結構挨拶を返してくれるようになってきたわね」

「うん。僕たちの印象が変わってきてるのかもかもしれないね」

「これなら、私たちと友達になってくれる人が出てくるかもしれないね」

私たちは期待に胸を膨らませていた。しかし、放課後まで誰も声を掛けてくれなかった。そして、放課後の三人の会議が開かれた。

「私たちのやっつてることって無意味なのかな？」と、私は尋ねた。

「そんなことは無いよ！ 少しずつだけど、効果が出てるよ」と、立花くんが言った。

「そうだよ。明日も頑張ろう！」と、桜姫が言った。

ガラガラガラ……。急に教室のドアが開き、一人の人が立っていた。

「田中、何を頑張るんだ？」

そこに立っていたのは、原先生だった。

「せ、先生！？ どうしてここに？」

「なんか騒がしかったから、様子を見に来たんだ。それで田中、何を頑張るんだ？」

「え、えつとですわね……」

「挨拶ですよ」と、立花くんがフォローをした。

「挨拶か。何で挨拶を頑張るんだ？」

「えーつと、……なんとなくです」

「そうか。なんとなくで、こんな会議みたいなことをしているのか」  
「……………」

「田中、本当の理由は何だ？」

「男子と……仲良くなりたかったからです」

「そうか。男子と仲良くなって、何をするんだ？」

「勉強を教えてもらうんです」と、私は桜姫をフォローした。

「なるほど。……別に男子だけに限定する必要は無いんじゃないか？」

「桜姫が咄嗟に口走っただけですよ。もちろん女子とも仲良くなつて、勉強を教えてもらいますよ」

「そうなのか田中？」

「は、はい。そうです」

「それならそうと早く言えよ。先生も協力してやる！」

「『ほえっ？』」

三人とも一斉に驚いた。

「何だその声は？ 先生が協力するのは嫌か？」

「『いえ、滅相もございません』」

三人とも息ピッタリだった。

「お前たち、本当に仲が良いんだな。よし、俺は明日からお前たちに協力する」

「『よ、よろしくお願いします』」

「おう、任せとけ！ それじゃあまた明日な」

なんか知らないけど、先生が私たちに協力してくれることになった。……… ややこしい事にならなければいいけど。

## 第九話 『せ、先生！？』

登校四日目。朝のホームルームが始まった。先生が余計なことをしなきゃいいけど……。

「みんなおはよう。ちゃんと勉強してるか？」

「当たり前じゃないですか」と、篠山くんが言った。

「そうか、篠山は勉強熱心なんだな。……効率良く勉強する方法があるんだが、知りたいか？」

「効率良く勉強する方法？ それはどんな方法ですか？」

「それは……友達と一緒に勉強することだ！」

「友達と一緒に？ それだと余計に効率が悪くなると思うんですけど」

「確かにそう思うかもしれない。だけど、それは勝手な思い込みだ。友達に教えることによって、自分の勉強になる。友達に教えられることによって、その教えられたことは深く印象に残る」

「でも、一人でもふざける人がいたら、まともに勉強できないと思うんですけど」

「確かに。でも、それをしっかりと抑止できるのが友達だ」

「そんなことをしている暇は無いですよ。やっぱり一人でやった方が効率が良いですよ」

「逆に、一人でやると集中できないなんて奴もいる。それに一人じやわからない問題だってある。そんな時に教えあえる友達がいればスムーズに勉強ができる」

先生、良いこと言いますね。

「……………。ていうか、何でそんなに友達と勉強することを奨励するんですか？」

「このクラスで、友達と勉強することを望んでいる人がいるからだ」  
せ、先生っ！？ 余計なことを言わないでえー！。

篠山くんはこちらを睨みつけていた。私は必死に目を合わせない

ようにした。

「先生、俺は一人でどうにかしますよ。やるなら、勝手にやっってくださいよ」

「……わかった。強要はできないからな。だけどな篠山、いつか差が付くぞ」

「俺は誰にも負けないうすよ」

篠山くんは、怒りのこもった声で言った。篠山くんの気迫が凄かった。

「わかった。他の奴ら、明日から朝のホームルームの時間の大半は友達と勉強をする時間にする。もちろん、一人でいたい奴がいれば、それでも構わない。自由にするといいさ。……よしつ、ホームルーム終わり」

先生は教室を出ていった。それと同時に、篠山くんが凄い形相でこちらにきた。

「お前ら、そんなに俺の邪魔がしたいのかよ！」

「そ、そんなつもりは……」

「うるせえつ。センコーを味方につけたつもりか？ そんなのに俺は屈しねーからな！」

「ちよつ、ちよつと篠山くん！？」と言いながら、桜姫がこちらに来た。

「ちつ。……俺の邪魔をすんなよ」と、捨て台詞を吐いて、自分の席へと戻っていった。

「陽！ 大丈夫？」

「桜姫！ ありがとう。……大丈夫だよ」

篠山くんがかなり必死だということが、よくわかった。

「陽、あんな奴のこと、気にしちゃダメだよ」

「う、うん」

私たちって、また篠山くんの邪魔をしてる？ このままでいいのかな？

## 第十話 『恋の予感』

登校五日目。朝のホームルームの時間は勉強の時間になった。

「みんな、わからないことがあつたら周りの奴に聞くんだぞ。もちろんおしゃべりの時間じゃないからな」

先生がそう言い終わると、桜姫が真つ先にこちらに向かって来た。

「陽、この問題教えて」

「この問題？ これはこうやって……」

私は桜姫に問題の解き方を教えた。

「なるほど。とても分かりやすい説明だった」

「桜姫、大袈裟だよ」

「へえ、赤城さんで頭良いんだね」

急に、隣の坂下大志くんが話し掛けてきた。しかし、これは絶好のチャンスかもしれない。

「坂下くん、そんなこと無いよ」

「いや、赤城さんは頭が良い。実は、俺もその問題が解けなかったんだ」

「そうなんだ」

「……俺にも解き方を教えてくれないかな？」

「うん、いいよ」

私は坂下くんに、問題の解き方を懇切丁寧に教えた。

「なるほど。かなり分かりやすい」

「そんなこと無いわ」

「謙遜する事はないよ。……明日もまた教えてもらってもいいかな？」

「私に分かることなら、いつでも」

「ありがとう！」

「うん。……ねえ、坂下くん」

「何？」

「私たちって、友達になったのかな？」

「急にどうしたの？」

「私たちってさあ、登校初日にみんなに変な印象を与えたでしょ？  
坂下くんもそのことを気にしてるのかなあ」と思ったの」

「そんなこと最初から気にしてないよ。俺たちは、もう友達だよ」  
坂下くんは満面の笑みでそう答えた。

ドキッ。この一言に、陽の心は奪われた。

「そ、そうだね……。そ、そういえば、私の友達を紹介するね」

私は桜に顔を向けて、桜姫のことを坂下くんに紹介した。

「私の友達の田中桜姫。友達というか、親友だよ」

「ど、どうも、田中桜姫です。えっと……とりあえずよろしくね」  
珍しく桜姫が緊張してる。

「よろしくね、田中さん。俺も田中さんたちと親友になれるかな？」

「な、なれると思う！」

「むしろ、それ以上の」

桜姫が全部言葉にする前に、私は桜姫の口を塞いだ。

「それ以上？」

「あははは、何でもないの。そうよね桜姫」

桜姫は必死に頷いた。それを見た坂下くんは、微笑んでいた。

「ホントに仲が良いんだね。俺ももつと赤城さんや田中さんのことを知って、もつと仲良くなる！そして俺のことももつと知ってもらうー！」

「私ももつと知ってもらいたい。これからよろしくね」

「こちらこそ、よろしく」

坂下くんはとても情熱的な人なのかも……。

陽の心は、坂下へとの凄いスピードで向かっていた。

## 第十一話 『好きなのかな?』

登校六日目。今日の陽はいつもよりもよりいっそう輝いて見えた。

「赤城さん、おはよー」

「あ、坂下くん！ おはよー」

「今日も勉強を教えてもらってもいいかな？」

「もちろん!」

「じゃあ、ここを教えて!」

「ここ? ここはこうやって……」

陽は坂下くんに、勉強を真剣に教えた。

「なるほど。今回の説明もとても分かりやすい」

「そ、そうかな?」と言いながら、陽は赤面していた。

「うん、分かりやすい。……あれ、赤城さん顔が赤いよ。熱があるんじゃないの?」

そう言いながら、陽の額に手を当てた。

陽は、さらに赤面した。

「……熱は無いみたいだ。大丈夫?」

「だ、大丈夫だよ」

「一応、保健室に行く?」

「ほ、ホントに大丈夫だよ」と、陽は必死に言った。

「そう、ならいいんだけど」

そんなこんなで朝のホームルームが終わった。

そして、今日の授業も終わり、放課後になった。そして、いつも通りの会議が開かれた。

「陽、朝のホームルームの時に、坂下くんといっしょに雰囲気になっ  
てなかった?」

「そ、そんなこと無いよ!」

「またまた!。顔が赤くなってたわよ」

「桜姫、見てたの?」

「もちろん！ 陽は坂下くんのこと……好き？」

「さ、さあ？ どうなんだろう？」

「えっ！ 赤城さん、坂下くんのが好きなの？」

「た、立花くん！？ 声が大きいつ」

「ご、ごめん。それで……どうなの？」

「この感情は、好きってことなのかな？ 今の段階では分からない」

「今の段階では分からないってことは、今後好きになる可能性は有るってこと？」

「それも分からない」

「そう。もし陽が、坂下くんのことを好きになったときは、私は全力で陽に協力する！」

「桜姫………ありがとう！」

「ぼ、僕も協力する！」

「立花くんもありがとう！」

（私は坂下くんのが好きなのかな？）

陽は悩んでいた。こんなに早く、人を好きになるのかと……。

「ねえ桜姫、立花くん。初めて顔を合わせてから一週間も経たないうちに、人を好きになることってあるのかな？」

「『もちろん！』」

桜姫と立花くんは同時に答えた。

「一目惚れだつてあるのよ。人を好きになる早さなんて、人それぞれよ」

「そうだね。陽ちゃんが『この人と一緒に居たい！』と思つたなら、それでいいと思う」

「桜姫、立花くん。ありがとう！」

「陽、今年中にいい恋をして、彼氏をつくりなさいよ！」

「桜姫もね！ もちろん立花くんも！」

「僕も頑張る！」

こうして、それぞれの決意が固まり、放課後の会議は終わった。

## 第十二話 『私のこと、どう思う?』

登校七日目。今日もまた、朝のホームルームで、陽は坂下くんに勉強を教えていた。

「赤城さん、今日の説明もとても分かりやすかったよ!」

坂下くんは満面の笑みで言った。その笑顔を見て、陽の心はときめいていた。

「……………ねえ、坂下くん。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」「何?」

「私のこと……………どう思ってる?」

「うーん……………頭が良くて、良い人かな」

「……………そうなんだ」

「こらっ! そこ、私語は厳禁だぞ!」

こちらに原先生が来て、原先生に注意された。

「すみません」と、坂下くんが謝った。

「次からは気をつけるように」

「はい」

原先生は教壇に戻った。

「坂下くん、ごめんね」と、私は小声で謝った。

「気にしないで」と、坂下くんも小声で言った。

「よしっ、ホームルーム終わりだ」

原先生の号令でホームルームが終わった。それと同時に坂下くんは教室を出て行き、そして桜姫がこちらに向かってきた。

「ねえ陽、何で先生に怒られてたの?」

「坂下くんは少しお喋りしてたら、見つかったちゃった」

「何の話をしてたの?」

「えっと……………秘密」

「ええ、教えてよ」

「ダメ」

「私たち親友じゃん」  
「……わかった」  
「それで、何の話をしてたの？」  
「……坂下くんは、私のことをどう思ってるかっていう話」  
「陽……大胆だね！」  
「桜姫！ 声が大きいつ！」  
「あつ、ごめん。……それで、坂下くんは何て答えたの？」  
「頭が良くて、良い人だつて」  
「……それだけ？」  
「うん」  
「頭が良くて、良い人ね。……好きか嫌いかわかんかったの？」  
「そ、そんなこと……聞けるわけ無いでしょ！」  
「そうなんだ。残念」  
「……桜姫は私のことばかり気にしてるけど、桜姫は好きな人とか、気になる人とかいないの？」  
「私？ 私はまだいない」  
「そうなんだ。友達が増えた？」  
「友達が増えたよ」  
「何て名前の人？」  
「切室昇くん。私の隣の席の人」  
私は桜姫の隣の席の人を見た。  
「イケメンじゃん。桜姫は切室くんのこと好きじゃないの？」  
「今年の私は性格を重視するの！ 見た目だけじゃ決めらんないよ」  
「そうだったね」  
「そうよ。だから、切室くんのことを、もっと知ろうと思ってるの」  
「桜姫……。なんか変わったね」  
「そうかな？」  
「うん。前より、ちょっと大人になった気がする」  
「そんなことないよ。……陽は前よりももっと輝いてる。前も輝いてたけど」

「そんなことないよ」

「お互いに、知らないうちに、少しずつだけど成長してるのかもね」  
「そうなのかもね」

陽と桜姫は、自分たちの恋のために、少しずつ前進していた。

第十三話 『坂下くんの家に行ってみない?』

登校八日目。今日は坂下くんは休みだった。風邪でも引いたのかな?

朝のホームルームが終わり、桜姫が私の席の所に来た。

「坂下くん休みだね」

「……うん」

「寂しい?」

「……ちよつと寂しいかも」

「もお、素直じゃないなあー。かなり寂しいんでしょ?」

「……うん」

「じゃあ、今日坂下くんの家に行ってみない?」

「行くつて……どうやって?」

「うーん、……わかんない」

「わからないのに、坂下くんの家に行くなんて言ったの?」

「ごめん。……どうすれば、坂下くんの家を見つけることができる

かな?」

「先生に聞く……とか、どうかな?」

「先生、教えてくれるかな?」

「……たぶん教えてくれないね」

「先生が何を教えてくれないんだ?」と言いながら、先生が横に立っていた。

「せ、先生!?!」

「赤城、何でそんなに驚くんだ?」

「お、驚いてないですよ」

「そうか。……それで、先生が何を教えてくれないんだ? 先生が

教えられることなら、何でも教えてやる」

「えーつと……」

私は答えに戸惑っていた。

「先生！」と、急に桜姫が言った。

「田中、どうした？」

「坂下くんの家にプリントを届けたいんですけど、住所を教えてくださいませんか？」と、桜姫がフォローをしてくれた。

「プリントを届けてもらうのはありがたいんだが、住所を教えるのは……」

「じゃあ坂下くんに、家に行っていていいかどうか、確認をしてください」

「何でお前たちが届けるんだ？」

「私たちは“友達”だからです」

「……わかった。放課後までに確認をしておこう」

「あっ！ 確認をする時に、私と陽で行くって伝えてください」

「わかった。それじゃあ、結果は放課後に」

「ありがとうございます」

原先生は、職員室へと戻っていった。

「桜姫……ありがとうございます」

「別にいいよ。……でも、ホントは陽の口から伝えて欲しかった」

「ごめん。言おうと思ったんだけど……言えなかった」

「ま、しょうがないよ。坂下くんの家に行ったら、たくさんお喋りしてくれるんだよ」

「えっ？ 桜姫は行かないの？」

「私は用事があるから、行けない。だから、陽一人で行ってきなよ」

「……わかった。次は頑張る！」

そして、放課後になった。

「赤城、田中。坂下に電話をして、確認をしたぞ」

「それで、結果は……」

「OKだそうだ」

「ありがとうございます！」

「これが住所だ。じゃあ、このプリントを届けてくれ。よろしくな！」

「はい。任せてください」

原先生は教室を出た。

「陽、ここからはあなたの独壇場よ。頑張って！」

「うん！ じゃあ行ってくる！」

私は桜姫を教室に残して、坂下くんの家へ向かった。

「陽……………大丈夫かな？」

第十四話 『坂下くんの家』

「ここが坂下くんの家」

陽の目の前には、とても大きな二階建ての家が建っていた。

「おつきい〜」

陽は啞然としていた。

「……見取れてる場合じゃなかった」

陽は坂下くんの家の扉の前に立って、チャイムに指を当てていた。

（押せ！ 押すのよ、私！）

ピンポン。とうとうチャイムを押してしまった。もう後には引けない。

「はい」という声が出て、扉が開いた。

そこには、坂下くんのお母さんらしき人が立っていた。

「あら、とても可愛い人」

「こ、こんにちは。坂下く……じゃなくて、大志くんのクラスメートの赤城陽と申します。大志くんプリントを届けに来ました」

「あら、ありがとございます。私は大志の母です。……よかったですら部屋が上がって、大志に会ってやってください」

「わ、私は……」

「陽さんが会ってくれと、大志が喜びます」

「……それじゃあ、お邪魔します」

「どうぞ」

私は、坂下くんのお母さんに部屋の前まで案内してもらった。坂下くんの部屋は二階にあった。

「大志の部屋はここです。大志のことをよろしくお願いします」

「はい」

坂下くんのお母さんは、階段を降りていった。

私は、坂下くんの部屋のドアノブに手をかけていた。

「入っていいよ」と、中から坂下くんの声が出た。

私はドアを開けた。

「こ、こんにちは、坂下くん」

「赤城さん、こんにちは。田中さんは一緒じゃなかったの？」

「さ、桜姫は用事があつたみたいで、一緒に来れなかったの」

「そうなんだ」

「体調は大丈夫？」

「ちよつと風邪引いちゃつてて。でも、今は大丈夫。明日からは学校に行けるよ」

「良かった。……あつ、これが今日の分のプリントだよ」

「ありがとう。赤城さんの家つてここから近いの？」

「うーん……、まあまあ近いかな」

「わざわざ届けてもらつてごめん」

「あつ、気にしないで」

「今度何かお返しをするよ」

「別にいいよ」

「いつも勉強を教えてもらつてるし」

「あれは私が好きでやってることだから」

「じゃあ、……今度の日曜日に遊びに行かない？」

「えっ？」

「嫌……かな？」

「……嫌じゃないよ」

「じゃあ、行こっ！」

「……うん、わかった。……そろそろ帰るね」

「うん。また明日」

「それじゃあまた」

私は坂下くんの部屋を出て、階段を降りた。

「赤城さん、もう帰るんですか？」

「はい。お邪魔しました」

「今日はありがとうございました。今後も大志のことをよろしくお願ひします」

「いえ、こちらこそよろしくお願いします。では、失礼します」  
私は坂下くんの家を後にし、家路についた。  
「日曜日……楽しみだなあ」

## 第十五話 『待ち遠しい』

登校九日目。陽の顔は、いつもよりもゆるゆるだった。そこに登校してきたばかりの桜姫が近づいてきた。

「陽、嬉しそうな顔をしてるけど、昨日は坂下くんとちゃんとお喋りできたの?」

「うん。お喋りできたよ」

「何を話したの?」

「坂下くんの体調について」

「それだけ?」

「あとは……秘密」

「まさか……デートの約束とか。……それは無いか。いくら何でも、早すぎるよね」

「……」

「陽? ……もしかして」

「……うん。デートの約束をしちゃった」

「えーっ!」

桜姫が驚いていたら、教室に坂下くんが入ってきた。

「赤城さん、おはよう。昨日はありがとう」

「お、おはよう。ど、どういたしまして」

「坂下くん、おはよう」

「田中さん、おはよう」

「体調はもう大丈夫なの?」

「うん、大丈夫」

「よかったね。それじゃあ、私は席に戻るね」

桜姫は、私にウインクをして自分の席に戻っていった。

「田中さん、良い人だね」

「うん」

私たちが話をしてる間に、先生が教壇に立っていた。

「はい、お喋りはそこまでだ。朝のホームルームを始めるぞ」  
いつも通りに、朝のホームルームが始まった。

「赤城さん、今日はしっかり解いてきたよ。答え合わせをしてもいいかな？」

「うん、答え合わせをしよう」

陽と坂下くんは答え合わせを始めた。

「全問正解。やったね坂下くん！」

「赤城さんのおかげだよ」

「私は、ほとんど何もしてないわ。坂下くんが努力したからだよ」

「そんなこと無いよ。俺がこんなに解けるようになったのは、赤城さんが一所懸命教えてくれたからだよ」

「そうかな？」

「そうだよ。いつもお世話になってるから、日曜日にたくさん恩返しをするよ」

「う、うん。日曜日楽しみにしてる」

私たちは、ホームルームの時間ということ忘れて、話に集中していた。

「赤城いゝ、坂下あゝ。今は何の時間だあ？」

原先生が怒りを露わにしていた。

「『すみません』と、二人は同時に謝った。

「坂下、元気になったのは良いことだが、ほどほどにしとけよ」

「……はい」

「赤城、お前も浮かれてちゃダメだぞ！」

「……はい。すみませんでした」

「分かればいいんだ。よしっ、ホームルーム終わりだ」

原先生は教室を出ていった。

「坂下くん、ごめん」

「気にしないで」

「この前も迷惑をかけたのに……」

「俺は気にしてないから。それよりも、日曜日のことを決めようよ」

「うん！」

「集場所は……駅前しよう。駅は家から近い？」

「うん。結構近いよ」

「集場所は駅前でOK。集合時間は何時にする？」

「うん……、正午はどうか？」

「よしっ、じゃあ正午にしよう。これで決まりだね」

「うん。決まりだね」

「当日のスケジュールは俺に任せて！」

「うん、楽しみしとくね！」

日曜日がとても待ち遠しい。……はあ。早く日曜日にならないかなあー。

## 第十六話 『デート前の会議』

登校十日目の放課後。陽と桜姫と立花くんによる会議が開かれていた。

「陽、日曜日に坂下くんとデートってホントなの？」

「えっ？ 陽ちゃん、坂下くんとデートをするの？」

「……うん」

「陽、デート当日のスケジュールは決まってるの？」

「うん。坂下くんがスケジュールを決めてくるんだって」

「坂下くんはしっかりしてるんだね」

「あら。立花くんはデートのスケジュールを組めないの？」

「桜姫ちゃん意地悪な質問だね。僕だって、スケジュールくらいは組めるよ」

「へえー、そうなんだ」

「何で棒読みなの？」

「なんとなくよ。そういうえば、陽は日曜日に告白するんでしょ？」

「ふえっ？」

「こんな機会は滅多に無いわよ」

「そうだよ陽ちゃん。この機会を逃したら、次は無いかもしれないよ」

「次が無いなんてことは有り得ないけど」

「……なんか今日の桜姫ちゃんきついね」

「そんなこと無いわ。それで、陽は告白するの？」

「む、無理だよー。こ、告白だなんて」

「……そうよね。陽はシャイだもんね！」

「それもあるけど……。ちよつと不安もあるの……」

「……卒業式にフラれたこと？」

「うん。……また同じことになるんじゃないかって思ってるの」

「誰だってそう思うわよ。でも、坂下くんも同じことをするとは限

らないじゃない」

「それはそうなんだけど……」

「……陽ちゃんのことをフって、それにこんな心の傷を残すなんて陽ちゃんの元彼は最低な奴だ！」

「珍しく立花くんと考えが一致したわ！ 私もあの人は最低だと思  
う」

「彼のことをそんなに悪く言わないで！ ……私にも悪いところあ  
ったから」

「ごめん、陽」

「陽ちゃん、ごめん」

「私こそ……ごめん。二人は私のことを考えてくれてるんだよね。  
それなのに私……」

「陽、気にしないで。私たち、陽に幸せになっただけ」

「そうだよ。だから、陽ちゃんは陽ちゃんのペースで恋をすればい  
いと思う」

「二人ともありがとう！ 私は、今できることを全力でやる！」

「やっといつもの陽らしくなってきたね」

「陽ちゃんはいつもの陽ちゃんのまま大丈夫だよ」

「うん」

「日曜日はとことん楽しんでくるんだよ」

「うん。楽しんでくる！」

こうして、デート前の放課後会議は終わった。

## 第十七話 『運命のデート』

とうとうこの日が来てしまった。運命の日曜日。

待ち合わせ場所の駅に、集合時間の十分前に着いたけど、坂下くんはもう集合場所に來ていた。

「ご、ごめん。待った？」

「ううん、俺もさつき着いたところ。それじゃあ行こっか」

「うん！」

私たちは歩き始めた。私は、どのくらい距離で歩けばいいかわからず、坂下くんの少し斜め後ろを歩いた。

「赤城さん、俺と一緒に歩くのは恥ずかしい？」

「そ、そんなことは無いよ！」

「よかった。赤城さん、ご飯は食べてきたの？」

「ううん。まだだよ」

「なら、まずはご飯を食べに行こう。俺のオススメの店があるんだけど、そこでいいかな？」

「うん」

私たちは、坂下くんオススメのレストランに着いた。

「お洒落しやれなところだね！」

「うん。料理も凄く美味しいんだよ！ それじゃあ、中に入ろうか」

「うん」

私たちはレストランの中に入って、テーブルについた。

「全部美味しそうだね」

「俺のオススメはパスタかな」

「そうなの？ じゃあ、私はパスタにする」

「俺もパスタにするよ」

私たちはパスタを注文した。

「パスタ美味しい〜」

「よかった、気に入ってもらえて。ここのレストランは他の料理も

美味しいよ」

「そうなんだ。それならまた来たいなあー」

「じゃあ、また一緒に来ようか？」

「えっ？」

「嫌……かな？」

「い、嫌じゃないよ。また来たい！」

「うん、じゃあまた来よう」

私たちはパスタを完食し、レジに向かった。

「お会計、三千円になります」

私がお財布からお金を出そうとすると、坂下くんは私の手を押さえて、

「赤城さん、ここは俺が払うよ。この前のお礼」と言ってくれた。会計が終わり、レストランから出た。

「ご馳走さまでした！」

「よかった。次はボーリングに行こう。赤城さん、ボーリングは嫌い？」

「ううん。嫌いじゃないけど、ちょっと苦手かな」

「じゃあ俺が特訓をしてあげるよ」

「ありがとう！ それじゃあボーリングに行こう」

私たちはボーリング場へ向かった。ボーリング場までは、電車と徒歩で行った。

「ボーリングやるの久しぶり」

「俺も久しぶり。よし、楽しむぞー」

私と坂下くんはボーリングを始めた。

最初の一投目。私はガーター、坂下くんはストライクだった。

「坂下くん、ホントに上手だね」

「そんなこと無いよ。赤城さんもちょっと練習をすれば上手くなるよ」

二投目を投げる前に、坂下くんに投げ方のコツや立ち位置を教えてもらった。そして私は二投目を投げた。

「やったあー、スぺアだ！」

「赤城さん、呑み込み早いね〜」

「坂下くんの教え方が上手いんだよ」

「そうかな？ ……よし、じゃあ次投げよう」

私たちは一ゲームを終えて、スコアを見たら、坂下くと十ピン差だった。そして私たちはボーリング場を出た。

「赤城さん、惜しかったね」

「ちよつと悔しい。また勝負しようね」

「俺への挑戦なら、いつでも受けるよ。次は……ゲーセンに行こっか」

「うん。……プリクラとか撮りたいなあ」

「じゃあプリクラを撮ろう」

私たちはゲーセンへ向かった。ゲーセンまでの道は人通りが少なく、一人一人の顔がはつきりとわかった。

「赤城さん、疲れてない？」

「大丈夫だよ。坂下くんは疲れてないの？」

「俺も大丈夫」

坂下くと会話しながら、たまにすれ違う人の顔を少し見ている。歩いている人の中にはカップルもいた。

「あれ？ 陽？」

私の名前を呼ぶ声があったから振り返ってみると、そこには一組のカップルが立っていた。

「……………鷹たか！？」

## 第十八話 『元カレ』

目の前に立っていたのは、元カレの秋谷鷹あきや たかだった。

「陽、久しぶりだな」

「ひ、久しぶり」

「鷹あー、この人誰？」と、鷹の隣の女性が鷹に聞いていた。

「こいつは……俺の元カノだ」

「へえー、そうなんだ。じゃあ、隣の人は彼氏さんかな？」

「そうなんじゃねえーの？」

「ち、違う。坂下くんは友達よ」

「友達かよ、つまんねえーな。せっかく俺が卒業式にフってやったんだから、彼氏ぐらいつくつとけよ」

「フってやったって何よ!？」

「そのままの意味だよ」

「酷い!」

「鷹あー。鷹の元カノ、なんかウザいんだけど」

「こいつは前からこうなんだよ」

「私のこと……そんな風に思ってたの？ 酷い、酷すぎるよ」

私たちの会話をただ見ているだけだった坂下くんが、拳を強く握りしめていた。

「こんな奴ほつといてどっか行こうぜ」

鷹と彼女は、その場から立ち去ろうとしていた。

「おい」

「ああ？ 何だ友達さん？」と、鷹は振り返りながら言った。

それと同時に鈍い音がした。

「痛っ！ 何すんだよ!？」

「さつきから聞いてれば、好き勝手言いやがって」

「うるせー。俺がこいつに何を言おうが、お前には関係ねーだろ」

その一言の後に、また鈍い音がして、坂下くんが鷹の上に馬乗り

になっていた。

「関係無くねーよ。俺と赤城さんは、今デートしてんだよ。俺と赤城さんの時間を無駄にすんじゃねえ」

坂下くんは、鷹を何発も殴った。

「坂下くん、もういいよ。もうやめて」

私は後ろから坂下くんを止めた。

「ごめん、赤城さん」

坂下くんは立ち上がった。それと同時に鷹が起き上がって、坂下くんを殴った。

「ふざけんじやねえぞクソヤロウ！ おい、帰るぞ！」

「あつ、鷹！ ちょっと待ってえ〜」

鷹と彼女は帰っていった。

「坂下くん、大丈夫!？」

坂下くんの口の横には少し痣あざができていた。

「ごめんね。私の所為せいで坂下くんにケガさせて」

「大丈夫。ちょっと擦り剥むいたただけだから」

「でも……………」

「俺ってさ、ああいうの見てると我慢できないんだよね」

「……………ありがとう」

「いいよ。それじゃあ、残りの時間を楽しもうか」

「うん！」

私たちは、プリクラを撮ったり、UFOキャッチャーでぬいぐるみを取ってもらったりして、残りの時間を楽しんだ。

「坂下くん、そろそろ帰ろっか」

「うん、帰ろっ」

私たちは電車に乗って、集合場所だった駅に戻った。

「坂下くん、今日はありがとう」

「どういたしまして。明日からもまた勉強を教えてね」

「うん。それでね坂下くん……………。言いたいことがあるんだけど」

「何？」

「私……坂下くんのが……好き！」  
「……えっ？」

## 第十九話 『眠れない夜』

「私……坂下くんのが好き！ 私と付き合ってください！」

「ありがとう。……返事は今じゃないとダメかな？ いきなりだったから、まだ心の整理がついてないんだ」

「……返事は今じゃなくてもいい。私……待ってる」

私たちの間には沈黙が流れた。そして沈黙に耐えきれなくなったかのように、坂下くんが言葉を発した。

「そろそろ帰ろっか」

「う、うん。帰ろっ」

私たちはそれぞれの家路についた。

私は家に帰り着いてからも胸のドキドキが止まらなかった。

「どうしよう……。とうとう言っちゃった」

夜になっても胸のドキドキが止まらず、その日は一睡もできずに朝を迎えた。

「ドキドキが止まらなくて、一睡もできなかった……」

私は目の下に隈くまができたままの顔で、学校に登校をした。学校に着いた私は、すぐに机に顔を伏せた。

(こんな顔を坂下くんに見られたくない)

「陽、おはよー」

元気良く桜姫が登校してきた。

「お、おはよー」と、顔を伏せたまま挨拶を返す。

「どうしたの陽？ 具合でも悪いの？」

「だ、大丈夫だよ！ ただ昨日寝れなかっただけだから」

「陽、一睡もしてないの!？」

「う、うん」

「どうして？」

「昨日いろいろあったの」

「いろいろ？ いろいろと何があったの？」

「ひ、秘密」

「ふーん。そういえば、昨日のデートはどうだったの？」

「た、楽しかったよ」

「よかったね。あつ、坂下くんが来たみたい！ それじゃあまたあとで」

「えっ？ 桜姫、ちょっと待って」と、顔を上げて言ったが、桜姫はもう自分の席へ戻っていた。

私は急いでまた顔を伏せた。そして一時して、隣の席に誰かが座る音がした。たぶん坂下くんだろう。

（ああー、やばい。顔を伏せてると、変に気を使わせるかも。でも今は顔を上げにくい）

私は心の中で葛藤をしていた。すると、

「おはよー赤城さん。どうしたの？ 具合でも悪いの？」と、坂下くんが声をかけてくれた。

（やっぱり気を使わせてしまった。ここは、思い切って顔を上げるしかない）

私は醜態をさらすことを覚悟して、顔を上げた。

「お、おはよー坂下くん。大丈夫だよ」

「あつ、目の下に隈ができてる」と、坂下くんは爽やかに微笑みながら言った。

「ちょ、ちょっと昨日は眠れなくて」

「……そうだよね、眠れないよね」

今日最初に見る坂下くんの顔にも、目の下に隈ができていた。

（坂下くんも眠れなかったんだ。私の告白に返事をするために、昨日からずっと考えてくれてたんだ）

「赤城さん、昨日の返事なんだけど……」

「……うん」

（例え、どんな結果になっても、後悔はしない）

「俺で良ければ……赤城さんの彼氏にしてください！」

その一言を聞いた私は、一気に緊張の糸が切れて、その場に倒れ

た。

「赤城さん、大丈夫！？ 赤城さん……」

私の名前を呼んでいる坂下くんの声がだんだんと遠退いていった。そして私は意識を失った。

次に意識が戻ったのは、保健室のベッドの上だった。

## 第二十話 『早期発見』

「あら、赤城さん。気がついたのね」

「はい。美浦先生、すみませんでした」

美浦先生は保健室の先生だ。

「びっくりしたわよ。急に倒れて、運ばれてきたんだから。原因は寝不足ね。ちゃんと睡眠をとらないとダメよ」

「はい……。そういえば、誰が運んでくれたんですか？」

「ここまで運んでくれたのは男の子だったわ。たしか……。坂下くんだったかしら」

「坂下くんが……。そうなんですか」

「もしかして……彼氏？」

「……はい。今日付き合い始めました」

「まさか……。彼氏のことを考えすぎて眠れなかったんじゃないの？」

「実は……。そうなんです」

「……青春ねえ。羨ましいわ。私も恋がしたい」

「先生もまだまだ恋できますよ」

「そうかな？ 恋できればいいなあ……。……赤城さん、元気になったら教室に戻っていいわよ」

「もう元気になったので、教室に戻ります」

「彼氏にお礼を言うのよ」

「はい。それでは、失礼しました」

私は保健室を出て、教室へ向かった。そして、授業が終わった少し後に教室に着いた。

「赤城さん、大丈夫！？」と言いながら、坂下くんが真っ先に近寄ってきた。

「さ、坂下くん……。大丈夫だよ」

「よかったあ」

「心配かけてごめんね」

「赤城さんが無事ならそれでいいんだ。次の授業は出れるの？」

「うん。次の授業からは出れるよ」

「あんまり無理しないでね」

「うん。ありがとう」

午後の授業を全部受け、放課後を迎えた。

「赤城さん……、一緒に帰ろう」

「うん、帰ろう！」

私たちは一緒に帰ることになった。

私たちがお喋りをしながら廊下を歩いていると、前からこちらに向かってくる人がいた。

「赤城、坂下。お前たち、随分と仲が良いみたいだな。もしかして

……、付き合ってるのか？」

こちらに向かってくるのは、原先生だった。

「はい、付き合ってます」と、坂下くんが答えた。

「そうか、それは羨ましいな。……ところで、俺がホームルームの時に言ったことを覚えているか？」

「……すみません。覚えていません」

「そうか、じゃあ思い出させてやる。俺が言ったのは、目標を達成させてやる。それは条件付きで、毎日努力をすること、それと……恋愛をしないことだ。お前たちは目標を達成したいとは思わないのか？」

「目標は達成したいですよ。でも……、恋愛もしたいです！」

「勉強と恋愛の両立は無理だ！ 今まで両立出来た奴を見たことがない」

「じゃあ俺たちが、両立できるってことを証明します」

「……好きにしろ」

原先生はその場から立ち去った。

## 第二十一話 『絶対に両立させる!』

私は唾然としていた。坂下くんが、先生に反抗するなんて……。

「赤城さん、さっき先生が言ったことは気にしなくていいよ。俺たちは俺たちのやり方で頑張ろう」

「うん、そうだね」

私たちは途中まで一緒に帰り、それぞれの家路についた。

私は家に帰り着いた。

(坂下くん、私のことを大事に思ってくれてる)

私は、これ以上無いくらいに、坂下くんのことを好きになっていった。

次の日の登校途中で桜姫に会った。

「陽、おはよー」

「桜姫、おはよー」

「昨日は大変だったね」

「うん。まあ、自業自得なんだけどね」

「それでさあ、……坂下くんと付き合ってるの?」

「……うん。坂下くんと付き合ってるわ」

「そうなの!? まさか、陽が告ったの?」

「うん、私から告白したわ」

「陽、やるじゃない! 見直したわ」

「桜姫、大袈裟よ」

「いいなあー。私も彼氏が欲しい」

「桜姫は切室くんと進展はあったの?」

「ないない。普通に話をするだけ」

「思い切ってデートの約束とかしちゃえばいいんじゃない?」

「それいいかもしれないわね」

「もし行くなら、今週の土曜か日曜がいいんじゃない?」

「うん、そうする」

会話をしながら歩いている間に学校に着いた。靴箱に靴を入れて、教室に向かおうとしたときに後ろから声が聞こえた。

「赤城さん、田中さんおはよー」

「あつ、坂下くん。おはよー」

「坂下くんおはよー。陽、お邪魔虫は先に教室に行くね」

「ちよつと桜姫!? もおー」

「田中さんはやっぱり面白い人だね」

「うん」

「俺、今日もしっかりと問題を解いてきたよ。また答え合わせをしよう」

「うん」

「勉強と恋愛を絶対に両立させる!」

「そうだね。原先生に『ギャフン』と言わせてやるっよ」

「それいいね」

私たちは教室に着いた。

そして、朝のホームルームの時間が始まった。私たちはいつも通りに答え合わせをした。

「今日は一問ミスだったね」

「残念だよ」

「コラー。そこ、イチヤイチャするな! お喋りせずに勉強しろ」

原先生に注意された。

「すみません」

ホームルームが終わり、原先生が教室を出ていった。

「原先生は俺たちの方ばかりを見ていた。先生は絶対に両立は無理だと思ってる」

「そうだね」

私たちが会話をしているとところに篠山くんが来た。

「お前たち、一々注意されんなよ。耳障りなんだよ」

「すまなかつたな」

「そっちの女には、邪魔するなって言ったよな？」

「うん、……ごめん」

「俺はお前たちとは違うんだ。いい加減にしろよな」

篠山くんは自分の席に戻っていった。

「私たちって、他の人に迷惑をかけてるんじゃないかな？」

「今日はそうだったかもしれないけど、気にしなくていい。俺たちは俺たちの道を進めばいいだけだよ」

## 第二十二話 『どうすればいいの?』

付き合い始めて一ヶ月が経った。私たちは順調に付き合っていた。しかしそれは、学校以外でのことだった。

学校では先生の目が、さらに厳しいものになっていた。

朝のホームルームが終わった。

「お前たち朝のホームルームで、いつも仲良さそうにしてるが、ちゃんと勉強してるのか?」

「はい、ちゃんとしてますよ」

「坂下は、最初に比べたら成績が上がっているが、赤城は少し下がっているぞ」

私は沈黙した。返す言葉が見つからない。成績が下がっていることも事実だったからだ。

「赤城、今の成績だと一柳大学は厳しいぞ。今日の放課後、二者面談をするぞ」

「……わかりました」

私は放課後に二者面談をすることになった。

そして放課後になった。

「赤城、今の成績のままでもいいと思うか?」

「……いいえ」

「恋愛を始めてから、成績が落ち始めたよな?」

「……」

「赤城、お前にとって恋愛とは何だ?」

「私にとって恋愛は……心の支えです」

「赤城……。それはお前の思い込みだ」

「どうしてそう言い切れるんですか!？」

「俺は……過去に失敗したからだ」

「えっ?」

「俺が高校生だった頃、俺には彼女がいた。あの頃の俺は彼女に夢中になっていた。勉強は中途半端にしかせず、彼女と同じ目標だった大学には行けなかった。そして、高校卒業と同時にフラれた」

「先生……」

「お前には俺と同じ思いをさせたくない」

「でも……」

「それでも坂下と付き合っつて言うなら、俺は止めない。いずれお前は後悔をするだろう。『あの時勉強しとけば良かった』と」

「……………」

「お前の人生だ。全ての決定権はお前にある。あとは好きにしる」

「……はい」

「もう帰っていいぞ」

「失礼しました」

私は学校出て、家路についた。

（私……どうすればいいのかな？ 先生が言ってることも正論だけど、坂下さんと別れるのは嫌）

陽はどうすればいいかわからず、家に着くまで一人で悩み続けた。

## 第二十三話 『別れても別れない方法』

家に帰り着いても悩んでいた私の顔を見て、お母さんが私のことを心配していた。

「陽、どうしたの？ 何か悩みでもあるの？」

「……うん。何も無い」

「表情に出てるわよ。お母さんに話してみなさいよ」

「実はね……」

私は、先生の教育方針と今までの経緯をお母さんに話した。

「なるほどね。先生は、『目標を達成したいなら恋愛をするな』って言ってるのね」

「そういうこと。……ねえ、お母さん」

「何？」

「私ね……よく考えたんだけど……、坂下さんと別れようと思ってるの」

「どうしてそういう結論に至ったの？」

「今のまま付き合ってたなら、二人とも目標を達成できなくなる。それなら別れた方がいい。それが二人のためになると思うから」

「それが、陽の出した答えなのね」

「……うん」

「陽がそう決めたなら、それでいいと思う。でもね、別れても別れない方法があるの。ただしそれは、二人の絆が試されるわ。その方法を今日一日考えてみて」

「何かの謎かけ？ 今日一日考えてみるわ」

「その答えが分かってから結論を出せばいい。もし答えが分からなかったなら……」

「別れるしかないってことね」

「そういうこと」

「わかった。ありがとうお母さん」

「陽……頑張つて！」

「うん！」

私は部屋に戻つて、お母さんが言っていた『別れても別れない方法』を考えることにした。

「別れても別れない方法があゝ。どうすればいいのかな」

私は一晩中考えた。そして朝を迎えた。

「私が出した結論は……」

陽は結論を出した。それが、お母さんの言っていた『別れても別れない方法』なのかわからないが……。

## 最終話 『愛、変わらず』

私は、暗い面持ちで学校に登校した。その途中で立花くんと会った。

「陽ちゃん、おはよー」

「立花くん、おはよう……」

「陽ちゃん、顔色が悪いみたいだけど、大丈夫？ 風邪でも引いてるんじゃないの？」

「大丈夫。風邪も引いてない」

「じゃあ、何か嫌なことでもあった？」

「……………」

「言いたくないなら言わなくてもいいよ。でも、困ったことや相談があるなら、僕や桜姫ちゃんに相談してよ」

「……………」ありがとう。立花くんのおかげでちょっと楽になった」

「それならよかった」

私たちが会話している間に学校に着いた。そして私は教室へと向かった。

教室に着いた。教室には坂下くんの姿は無かった。

(まだ来てないんだ)

陽が教室に着いてから五分後に坂下くんが来た。

「赤城さん、おはよー」

「さ、坂下くん、おはよう……………」

「赤城さん、顔色が悪いよ。具合でも悪いの？」

「ううん、大丈夫。あのね、坂下くん……………」ちょっと話したいことがあるんだけど……………」

「話したいこと？」

「うん。放課後、時間をもらっていいかな？」

「今は言えないことなの？」

「……………うん」  
「わかった」

この後の、私の坂下くんに対する接し方はとてもぎこちないものであった。そして、放課後を迎えた。

「赤城さん、話したいことって何なの？」

「私と……………」

「私と？」

「……………私と別れてほしいの」

「えっ？」

「私から告白したのに、私から別れ話を持ち出すなんて、最低だと思ってる」

「……………」

「でも、二人のためにはこうするしかないと思ったの」

「……………赤城さんがそう決めたなら、……………別れよう」

「……………別れる前に一つだけお願いがあるの」

「お願い？」

「うん。約一年後の受験で二人ともうまくいった時、その時にまだ私のことが好きだったら、私の彼氏になってください」

「……………」

坂下くんは何も言わずに教室を出ていった。

あれから約一年が経った。私は一柳大学に見事合格した。坂下くんも、自分の志望校に合格したと桜姫から聞いた。

それを聞いた私は、坂下くんの家へと向かった。

ピンポン。私は坂下くんの家のチャイムを鳴らした。

「はい」

ガチャツ。開いたドアから、坂下くんの姿が出てきた。

「赤城さん!」

「坂下くん、……………私の彼氏になってください!」

「……………俺の気持ちは一年前から変わってない」

「……………やっぱり無理だよな」

「……………何言ってるんだよ! 俺は一年前から赤城さん……………いや、陽のことが好きだ! 俺の気持ち、陽への愛は変わってない!」

「……………坂下くん」

「俺たちの愛は変わらない。何年経とうとも」

「……………うん。坂下くん……………大好き!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2530y/>

---

愛、変わらず

2011年11月29日00時56分発行